

仲尾 俊博 著

山家学生式序説

付叡山大師傳（石山本）

白 土 わ か

さき（昭四八）に『日本初期天台の研究』を公けにして、地道な日本天台の研究ぶりを評価されていた著者仲尾教授によって、今回、その研究の続きとなる『山家学生式序説付叡山大師傳（石山本）』が刊行され、労作が再び我々の前に示されることになった。現在、日本初期天台の研究で、その成果が公刊されているものは比較的少なく、とりわけ『山家学生式』の研究に至っては、昭和十三年に佐々木憲徳博士によって『山家学生式新釈』が公表されて以来、まとまった研究書は類例がなかったようである。本書はその意味でも評価さるべきものであるが、仲尾教授は佐々木博士の資にあたり、師資相並んで『山家学生式』の研究にとり組まれたことになる。仲尾教授は佐々木博士が龍谷大学に於て『山家学生式』を講ぜられた折の、唯一人の受講者でもあったという。

本書は、仲尾教授が西本願寺の安居に副講をつとめられたさき、講本として『山家学生式』をとりあげ、その成果として公

刊されたものであるが、さきの佐々木博士の『山家学生式新釈』もまた、同様の事情によって出版されたのであったということ、そこには龍谷大学のもつ日本天台の学問的伝統が偲ばれるのである。

次に本書の内容を概観すると、安居における講述という實際をうつつして講義風にまとめられているが、歴史的事実にそいつつ、その間には諸学者の説をも紹介し、『山家学生式』の諸問題に考察を加えている。

本論は、第一章「はしがき」に続いて、第二章「延暦二十五年の太政官符」から始まっている。それは『山家学生式』が、延暦二十五年の太政官符を格とするならその細則に当るという著者の所論によるものである。そこではまず最澄自筆の『天台法華宗年分縁起』の考察を行ない、『六条式』・『四条式』・『八条式』が『山家学生式』と通称されるに至った経緯を示し、次に延暦二十五年の太政官符の持つ問題点を述べている。それは華嚴・天台・律・三論・法相の各業の相奪禁止と、各業の学問興隆と、僧侶の生活の肅正を意図したもので、従来の年分度制を綜合した規定であり、その後の年分度制の基本法となる勝れた法であったとしている。しかし、それが実際に運用される時点になると欠点があり、かつ、学業の面でも理論的に根拠が十分なものであったことを指摘している。たとえば、天台業に於て要求された大日経研究の必然性や、律業における梵網經重視の理論的根拠の欠如等であるというのである。続いて、この太政官符の性格を明瞭にすべく、年分度者制というものの歴史

的事情について記述を進めている。

第三章「桓武天皇の佛教政策」の項では、平安初期の佛教及び最澄の佛教について考察するためには、桓武帝の佛教政策を度外視するわけにはいかない事情について論じている。

第四章「伝教大師最澄の法華経観」に於ては、最澄の入唐求法前の問題に関して述べているが、まず、天台法門との出会いや延暦十六年の一切経書写研究の問題をとりあげ、一切経書写研究の頃に於て最澄の幅広い佛教教学の基礎は培われたと見ており、法華一乗を法相よりも華嚴一乗よりも秀れたものと考えに至った事情を述べている。そしてその時点で、天台教学は日本佛教界の中で一つの地位を占めることができたのだとしている。

第五章「入唐求法について」の項では、入唐勅許の問題及び四宗相承の問題をとりあげている。四宗相承については、これが日本天台の中国天台と異なる所以の最たるものであるが、この問題については、佐々木博士が『山家学生式新釈』の中で主張された四宗相承否定論が、現在なお完全に克服されたものでなく、その研究が必要なことを強調している。

第六章「天台法華宗年分度学生名帳」の項では、平安新宗の樹立を念願として、その成功の為に最澄に入唐求法をも命じた桓武帝が、延暦二十三年に病氣でたおれ、事情が変化してきた中に最澄は帰朝したが、その帰朝報告の内容は、入唐前の上奏文に記した初期の目的とは異ってきている点に着目して論を進めている。すなわち、入唐前の目的は、天台円教の受法と天

台法文の将来にあったが、帰朝報告書を見るならば、天台円教とともに密教の受法について強調しているのが注意をひくわけである。これは、桓武帝の病氣という現実の事情と関連があるものと著者は理解しておられるようである。それはたしかに有力な説というべきであろう。なお、禪・戒・雜密の相承については、『叡山大師伝』に於ても不問に付されているが、いわゆる四宗相承は後年の『血脉譜』に至って書かれたものであり、天台円教中心の密・禪・戒を包容した大きなスケールの教学大系は、延暦年代では未だ考えが整理されていなかったと述べておられるが、この見解は妥当であろう。

最澄はこうして延暦二十五年の太政官符の中で、天台業二人に、一人には大毘盧遮那經を読ましめ、一人には摩訶止観を読ましめる年分度者の許可を受けていたのであるが、しかし密教についての最澄の力量は未だ十分ではなかったのであり、空海に弟子の礼をとらざるを得なかったいきさつを、空海側の資料や消息によって考察を加えている。

最澄と空海との交渉は、結局は密教に対する両者の考えの相違によって、すなわち最澄は円密一致の思想を体系づけようとし、空海は顕劣密勝の思想をより充実して即身成佛の教学を体系化しようとする双方の相違によって打ち切られるが、最澄にとっては天台教団樹立の道における必然であったことを著者は力説する。それは最澄にあつては、真言宗との妥協でもなく、法相宗の相奪を恐れることなく、天台業の自立は具足戒と訣別して大乘戒を打ち立てることにあるという自覚が、その根

本にあったというのである。そしてそれ故にこそ、『天台法華宗年分度者学生名帳』という、あるがままの天台学生の実態を書き記すことにもなったのであり、更に『山家学生式』によって、天台法華宗の主体性をとりもどしたのであると論じている。このあたりの著者の見解には鋭く光るものがある。

第七章「小乗戒棄捨」の項では、従来はあまり注意されなかったことではないかと断り書きして、空海の影響という点に注目している。その中でも空海の三昧耶戒主張は、最澄の大乗戒制定に刺戟を与えているであろうと論じている。この説は留意すべきものである。次に真野正順教授の説を引用して、最澄の大乗戒制定は「史的事情がその誘因をなせるは確かであるが、内面的にはすでに天台教学に内在せる述門的思想より本門的思想への転向と解すべきであろう」と記しているが、この説は注目すべく、かつ拡充展開されるべきものであらう。

第八章「大乗戒」に於ては、はじめに『山家学生式』の大乗戒主張は、一切皆成佛の実現的表現であるという所論に立って、三一権実について中国佛教に於ける問題から徳一との論争にわたって論述をすすめている。次に最澄の大乗戒は、聖徳太子・鑑真・行基・道璿・法進等の影響を受けて独自の説を主張するに至ったが、しかしなお、出家の菩薩僧としての資格を得るようにするためには、正統な伝戒師より円教の菩薩戒を受ける必要があり、中国に於ける師々相承の戒脉相伝及び智顗の『菩薩戒義疏』を加える必要があったとしている。

第九章「山家学生式」の項に於ては、その成立事情を前述の

ように、『山家学生式』の大乗戒は、三一権実論評を実際の場に具体化しようとしたものであり、すなわち、法華最勝のイデオロギーを、僧侶養成の現実の立場に於ける制度化実現を目指したものと規定している。それはまた延暦二十五年の太政官符を格とするなら、その細式化であったともいっている。

一つの教団が成立するためには、優秀な思想だけではその実現は不可能なのであって、制度化ということが必須条件であったと指摘し、そしてこの教育制度及び教団樹立の問題をはらんだ『山家学生式』の呈示は、南都教団の制約からの脱却を意味するものであって、日本佛教教団を二分する重大問題を意図するものであり、ここで日本佛教には宗派の觀念が明瞭になったとしている。『山家学生式』は決して天台年分学生教育問題という枠にとどまるものではなかったことを重ねて力説している。

『山家学生式』の内容の問題に関しては、『六条式』のいわゆる「照千一隅」の問題は、学界における議論の紹介にとどめて論述をさけている。又、『八条式』の第七条については、十二年間修業をした学生についてその待遇を、大法師位または法師位を賜わらんことを最澄は請求しているが、そのことについて著者は「きびしい生命がけの修業を終った菩薩僧のために、それ相当の待遇を要求していることは、理想だけでは教団は存続しないことを知っているのである。良い待遇を求めたことは、最澄の現実的感覚の鋭さと共に、どうしても新しい平安佛教としての天台法華宗を樹立したいという気迫のはげしさが感ぜられる。

る。」という著者の論述は、著者仲尾教授自身の歴史的感覚の鋭さと現実的感覚の確かさを示すものであろう。

第十章「むすび」に続いては、『山家学生式』のテキストとして、『天台法華宗年分学生式』（六条式）・『勸奨天台宗年分学生式』（八条式）・『天台法華宗年分得度回小向大式』（四条式）を、最澄真蹟『天台法華宗年分縁起』からの翻刻と、それに読点・書き下し・註を付している。

更に付録として、『更加法華宗年分二人定諸宗度者教官符』・『天台法華宗年分得度学生名帳』及び『叡山大師伝』（石山寺本）を載せているが、その中、前二者は真蹟『天台法華宗年分縁起』よりの翻刻と、読点・書き下し・註を付している。次の『叡山大師伝』は、石山寺に所蔵されていた貴重本（重文指定）で、最も原本の趣を伝えるものとされているだけに、その全写真を採録したことは、研究者のために資することが極めて大きい。同時にまた、『叡山大師伝』の諸本概説・校訂・書き下し・註も秀れた労作であって、その労苦に謝したい。なお、この『叡山大師伝』についての作業は大谷大学大学院生中西随功氏によるものである。

以上、ごくおおまかに本書の内容を紹介してきたが、本書は

克明な努力作であり、歴史的なまた現実的な鋭い感覚が、随所に目立つ書物である。諸学者の説をも丁寧に引用紹介しながら論述をすすめるあたりは、著者の篤実さを示すものであるが、読者にとっても便利なものであることは事実である。数少ない『山家学生式』研究書の一として、本書がもつ意味と比重は大きいといわねばならない。又、後学者のための指南書としても恰好なものであろう。

著者の歴史的な洞察の鋭さについては前から度々述べてきたことであったが、なお願わくは、本書中にも引用された真野正順教授の言の如く、最澄自身の内面的な佛教思想からの考察によって、その大乘戒建立に至らなければならなかった必然性についても御説を承りたいと念じている。又、本文中、不明な箇所については、後日、機を得てお教え頂きたいと考えているが、ともあれ、平安初期における、大乘戒建立という、政治的にも佛教学的にも、戒律の問題そのものに於ても、膨大な問題に向かって、その解明のくさびを打ちこまれた著者の労に感謝の意を表したい。

（一九八〇年七月 永田文昌堂 A5版 五二九頁索引九頁 九五〇円）